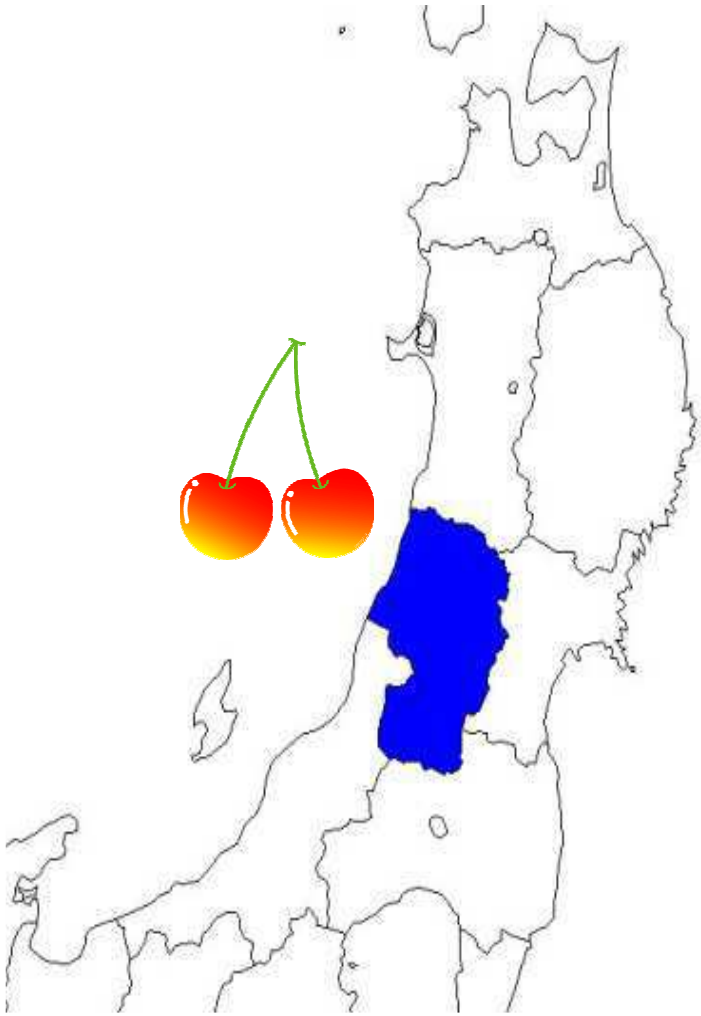
高次脳機能障害のある子どもに関する相談支援状況報告
―山形県の取り組み―

山形県庄内高次脳機能障がい者支援センター
鶴岡協立リハビリテーション病院
医療ソーシャルワーカー　齋藤儀久
作業療法士　板垣紳太郎

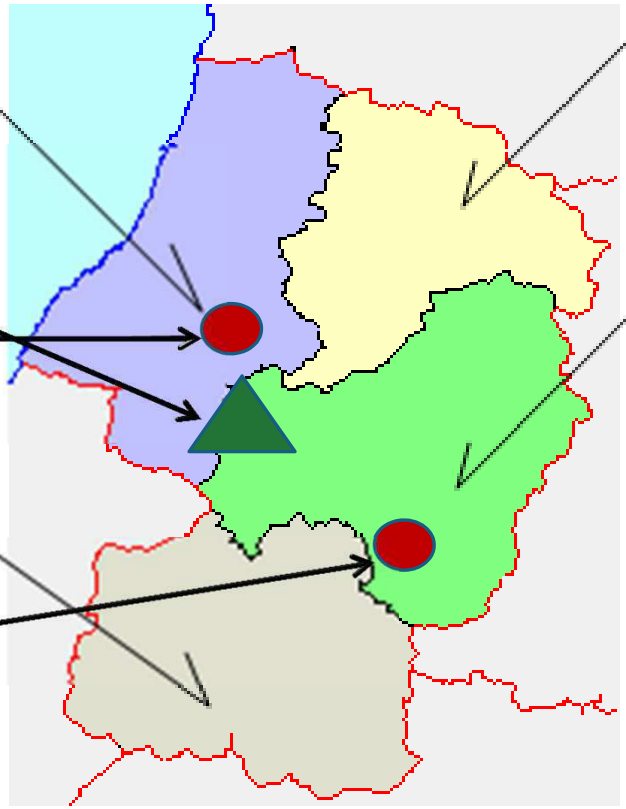
山形県の紹介①



人口：約１１３万人
名産：さくらんぼ
　　だだちゃ豆
　　ラ・フランス
　　つや姫（お米）　　など。
映画「おしん」や「おくりびと」のロケ地
県知事：吉村美栄子知事

山形県の紹介②

霊峰　月山



山形県庄内高次脳機能
障がい者支援センター

山形県高次脳機能
障がい者支援センター

http://www.maff.go.jp/tohoku/nouson/kokuei/mogamigawa/index.html　東北農政局　地図引用

山形県高次脳機能障害者支援事業

- 平成20年１２月　山形県高次脳機能障がい者支援センター開所
（国立病院機構山形病院内）
- 平成２２年８月　高次脳機能障がい通所教室「暁才」開所
- 平成２３年７月　山形県庄内高次脳機能障がい者支援センター
開所（鶴岡協立リハビリテーション病院内）

山形県庄内高次脳機能障がい者支援センター

鶴岡協立リハビリテーション病院　医療相談室内設置

支援センター設置経過

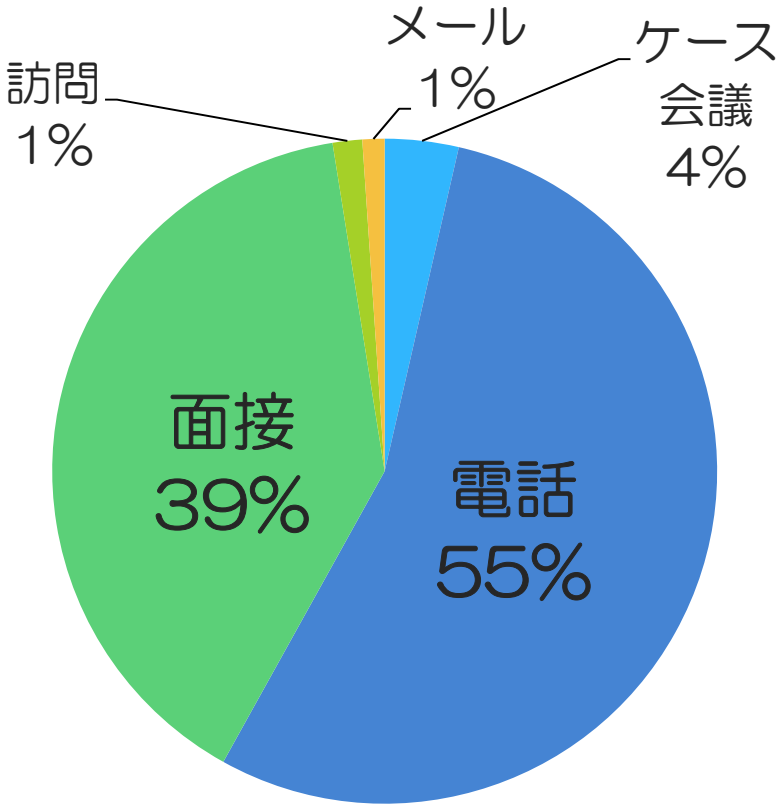
〇当支援センターは全国で３６番目の設置

平成２２年９月６日 県庁知事室「知事ほのぼのトーク」開催。
この中で、山形県高次脳機能障がい家族会「さくらんぼ」の
会員より庄内支援センター設置の要望があり。

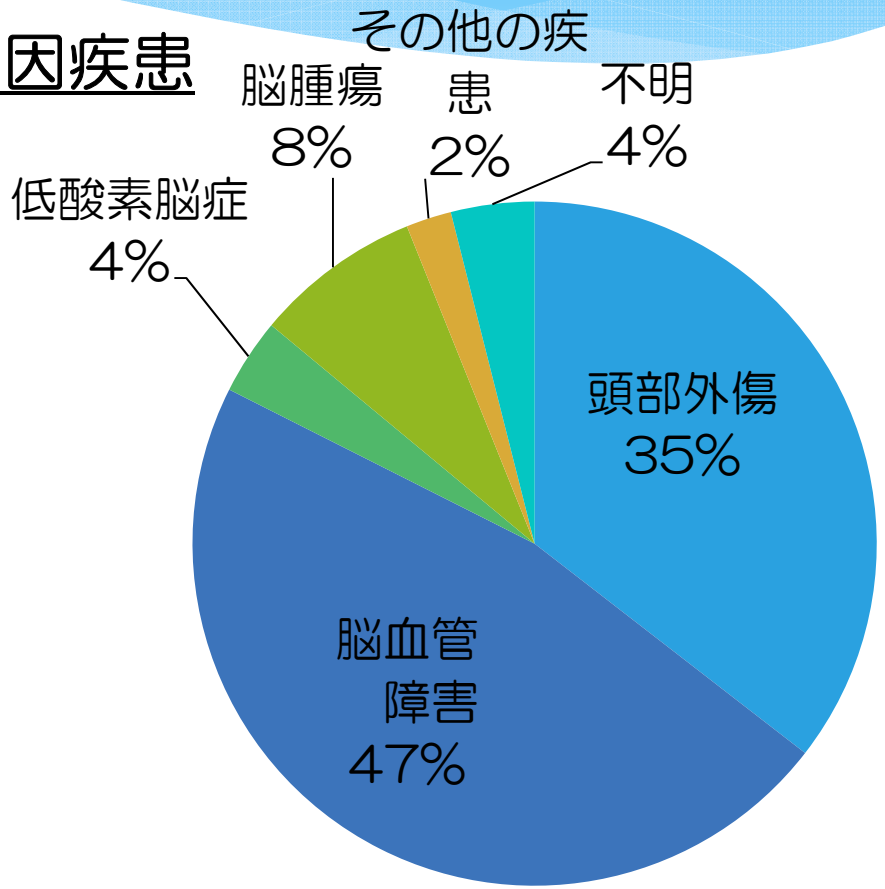
平成２５年度　相談実績（山形支援センター）

＊相談件数　２７９件

対応



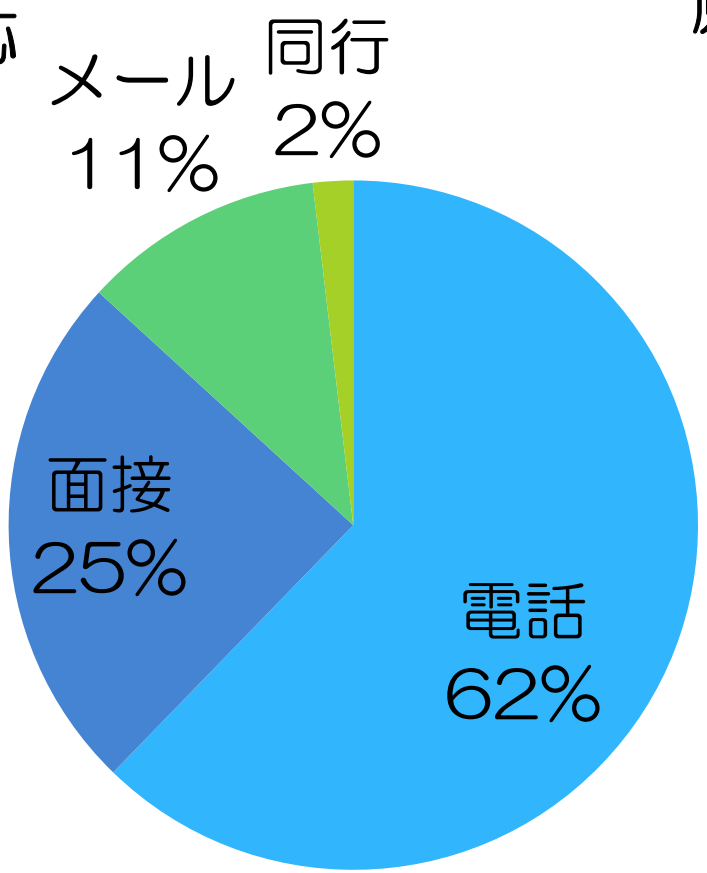
原因疾患



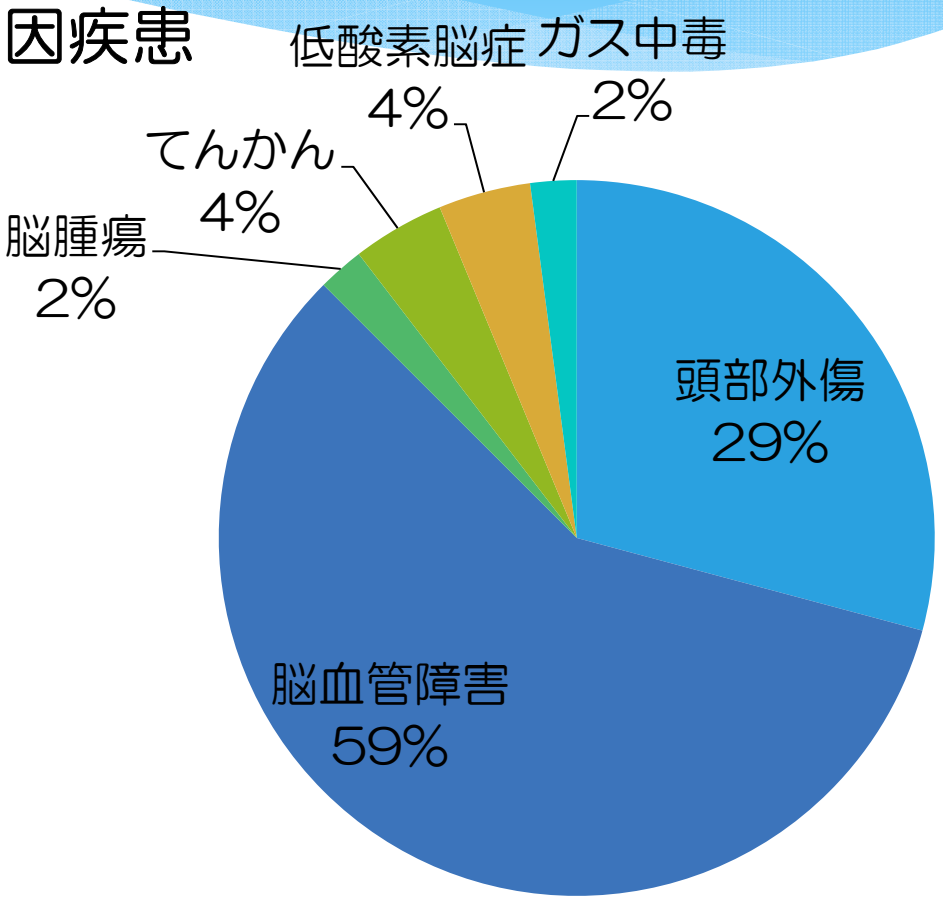
平成２５年度　相談実績（庄内支援センター）

相談件数：２１２件

対応



原因疾患



通所教室「暁才」について

１．目的

グループワーク等を通じた社会復帰トレーニングを行い、
若年の高次脳機能障がい者の社会的自立を目指す。

２．対象

１）医療機関にて「高次脳機能障害」と診断を受けていること。
２）医療上、社会復帰、就職に向け取り組んでも支障はないと
判断されており、復帰の意思を有していること。

プログラム内容①

1.見当識の訓練・・・ 出来事や行動の記憶を振り返る。

2. 認知ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ ・・・ﾄﾞﾘﾙ等を利用し注意力や遂行機能の訓練をする。

3. 自己理解（障害理解） ･･･疾患を知る、利用者間にて障害エピソードを発表する。

4. 社会性の向上・・・福祉制度等を含めた社会の仕組みを理解する

プログラム内容②

5．レクリエーション･･･連想ゲームやしりとり、調理体験を自主的に行う。

6．プレゼンテーション･･･自己紹介を組み立てたり、経験談や考えを短時間で話す。

7．問題解決・・・問題に対して、解決策や代償手段を提案しあう。

8．生活トレーニング・・・生活リズムや身だしなみを確認し合う

様々な取り組み

〇ドアに座席　と名前　を記入した用紙を貼り、入室前に確認する。

〇朝の会では、スケジュールの確認　や　5行日記、新聞発表など
リーダーが行う。

〇時間内に、課題や発表ができるよう、タイマー　・ストップウォッチ　砂時計　を利用する。（気づきを促す）

〇病院の医師やソーシャルワーカーと週に1～2回　情報交換　し、
就労や復職に向けて必要な支援を話し合う。（カンファランスなど）

暁才の運営方法

○　県からの委託費でまかなわれている。

○　利用者は負担なし。

○　利用期間は個別に設定している。

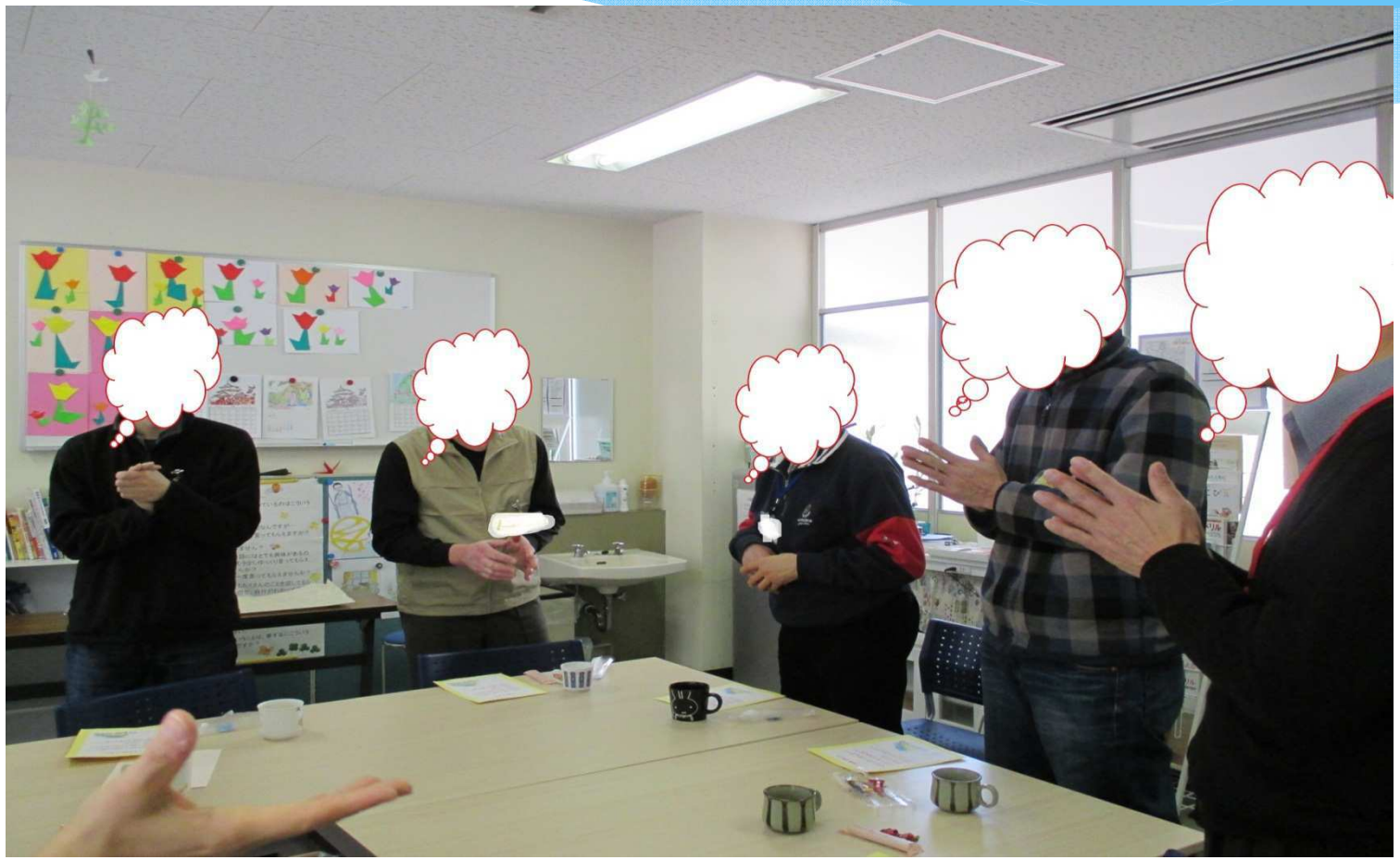
○　送迎はなし。公共交通機関の利用、またはご家族の送迎。

＊　介護保険サービスが優先

トレーニング～遂行機能訓練～

レクリエーション～調理体験～

暁才卒業～旅立ちの会～



山形高次脳機能障がい者家族会「さくらんぼ」

- 定例会の開催
- 国や県、関係機関への働きかけ
- 当事者活動、家族支援
- 相談事業

※昨年７月に庄内にて
山形の会員と定例会を行う。
庄内では２ヶ月に1回
茶話会開催。

復学支援　実績

介入件数…４ケース

回復期リハビリテーション病棟への入院から介入。

ケース１（２００９年）　高校２年生　交通事故　脳挫傷

退院時ＡＤＬ：車いす

ケース２（２０１１年）　中学３年生　交通事故　脳挫傷

退院時ＡＤＬ：装具着用し独歩自立

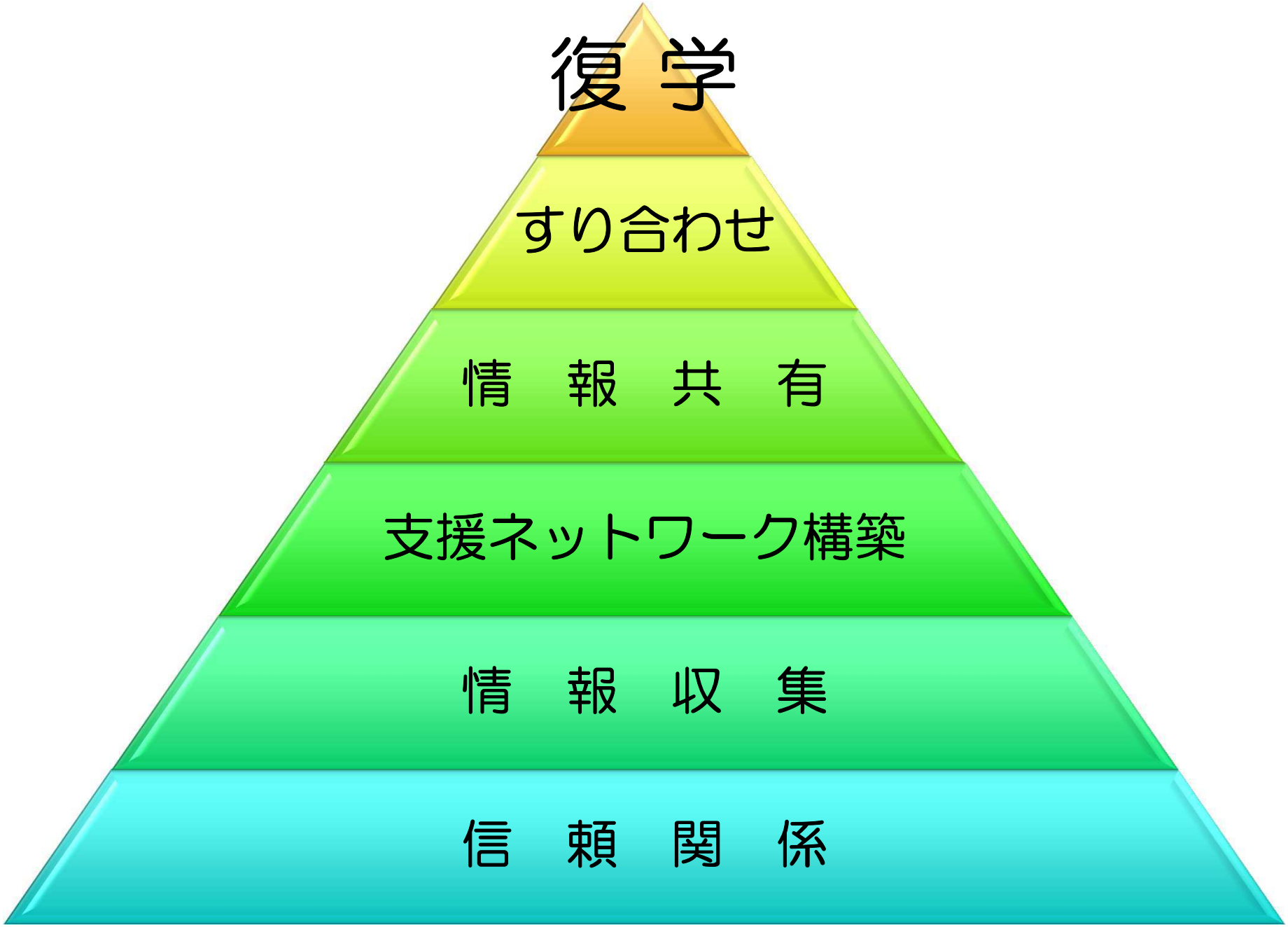
ケース３（２０１２年）　高校３年生　交通事故　脳挫傷

退院時ＡＤＬ：独歩自立

ケース４（２０１３年）　中学２年生　疾病　もやもや病

脳梗塞

退院時ＡＤＬ：装具＋４点杖　屋内自立


復 学
すり合わせ
情　報　共　有
支援ネットワーク構築
情　報　収　集
信　頼　関　係

復学支援　1

本人及び家人との信頼関係作り

・本人や家人、病院の共通目標を確認。
・チームで支援していく旨を伝える。
・復学へ向けて学校との情報共有など連携について了承を得る。

復学支援　２

本人や家人、学校からの情報収集

- 日常生活及び学校での生活状況
- 授業の流れや校内環境、本人の学力等
- 学校側の窓口（教頭や担任教員等）

＊学校にも入院及び訓練期間、退院時の目標について情報提供。

復学支援　３

支援ネットワークの構築

→家人や学校、必要に応じて障がい者相談支援センターや役所の福祉課などと連携を図る。

情報共有

→院内カンファレンス後、回復状況及び今後の予測について学校や関係者と情報共有。

復学支援　４

関係支援者との情報共有

学校訪問＊中学校の場合、教育委員会からも同席

・訓練経過の情報提供

→身体機能や学習能力、高次脳機能障がいについて説明

・校内の環境確認

→改修等、必要な環境整備については学校側検討。

復学支援　５

学校もしくは病院で担当者会議

（ＭＳＷがコーディネート）

・学校に回復状況を情報提供。

・復学後に考えられる、障がいからの影響や具体的な支援方法（関わり方）を情報提供。

・環境面含め受け入れなど学校で検討した内容や不安要素などについて確認。

＊復学の可否もふくめ検討

復学支援　６

すり合わせ

①授業への参加や登校を試験的に行う。

- 環境面の確認
- 教科ごとの担任教師や他の生徒からの理解を得るための準備期間。

②入院中の学習。

- 学校の先生が病院で授業を行う。
- 職員が付き添い学習をする時間を設ける。

事例紹介

年齢・性別：16歳　男性
診断名：脳挫傷（前頭葉の脳委縮あり）
障害名：両片麻痺　意識障害　高次脳機能障害
家族背景：父、母（キーパーソン）、兄の4人家族で現在は兄を除いて同居している。
学歴：私立高校へ通う2年生
本人希望：友達と卒業する
カリスマ美容師になりたい
性格：人見知りしない、ポジティブ

現病歴/リハビリ歴

X年Y月
自転車で走行中,車にはねられ．脳挫傷と診断される
X年Y月＋Z日
リハビリ開始
X年Y+2月
当院へ転院
X年Y+7月
退院 し,復学する.

作業療法評価

入院から38日目時点

身体機能

左上肢は目的の場所へリーチングすると大きくブレが生じる。

細かい作業は困難。

高次脳機能

見当識、注意、記憶、遂行機能の低下

運動性失語

精神機能

現実的に復学を考えられない

退院時（入院から158日目）

身体機能

左上肢のブレは減少。細かい作業は時間はかかるが遂行可能

高次脳機能

記憶力の低下は残存。失語は、言葉が出難いことあり

精神機能

問題点に対して解決への努力をしようとする。

日常生活活動

入院から38日目時点

移動：車椅子
排泄：身障者トイレ排泄
　　L字バー使用
更衣：自立
尿便意：自立
病棟での生活：
日中はぼっとして過ごしている。夜は遅くまで起き、携帯電話を使い遊んでいる。

退院時（入院から158日目）

移動：独歩　通学時：自転車
排泄：一般用トイレ（和洋）
階段：手すり使用して自立
登校手段：電車 自転車
病棟での生活：
積極的にスタッフに話しかけたり気配りしながら過ごしている。生活リズムは自分で調整可能となった。

復学への問題点と目標

問題点

①生活の自立が必要（歩行、身辺処理）
②高次脳機能障害（勉学・交友関係）
③入院期間中に留年の可能性

目標

復学（外来でのフォローを含めて）

リハビリ経過

移動面

車椅子自走 → ロフストランド杖 → 一本杖 → 独歩

自転車訓練

生活面

移動の獲得状況に合わせて、生活訓練（排泄、入浴）

→ 生活の自立

リハビリ経過２

口頭での説明や約束事が忘れやすい。細かい内容を思い出せないと「わかりません」「忘れました」
⇒代用手段として携帯を使用したメモの習慣化

１つの作業をしている際に気が散りやすい。
⇒時間を決めて机上課題
⇒興味のある作業を提供（プラモデル）
⇒静かな場所、環境設定

ニューヨーク大学医療センター・ラスク研究所の図を一部改変

リハビリ経過

留年の可能性

病院

校内評価（移動面）

入院中に一時復帰の必要

学校

必要単位の割り出し

家族

通学方法の検討

復学が現実的に

三者会議の開催

テーマ：共通認識について

病院	学校	家族
予測される問題点の提示	フォロー態勢について	授業参加状況の見学希望

復学調整

注意力、記憶力の低下

病院

予測される問題点の提示

・授業での国語の音読の順番や場所を忘れる。
・次の授業に必要な道具の準備に声かけが必要になる。
・本人が授業に興味を持たない場合、記憶として残りにくい。

対人関係

・対人関係に置いて、細かい所での配慮、気配りが行なえない。
・NGワードの確認

復学調整２

各教科で内容の配慮

学校

フォロー態勢について

- 体育：見学を基本とするが、体育館で簡単な運動動作をさせたい。
- 音楽：プリントや自主課題も含め、なるべく授業に参加する形をとる。
- テスト：通常通りだが参考点として考慮する。

生徒・職員の接し方の統一

母親見学可能

復学調整３

家族

授業参加状況
の見学希望

- 落ち込んだ時の対処
（学校との情報交換を密に）

- 交友関係の配慮
（今まで通り接してほしい）

復学調整３

一時的な復学

疲労によりノートを取らずぼっとしている
交友関係は良好、必ず誰かと一緒にいる
口頭で伝えたことは忘れるがある（メモは取れず）

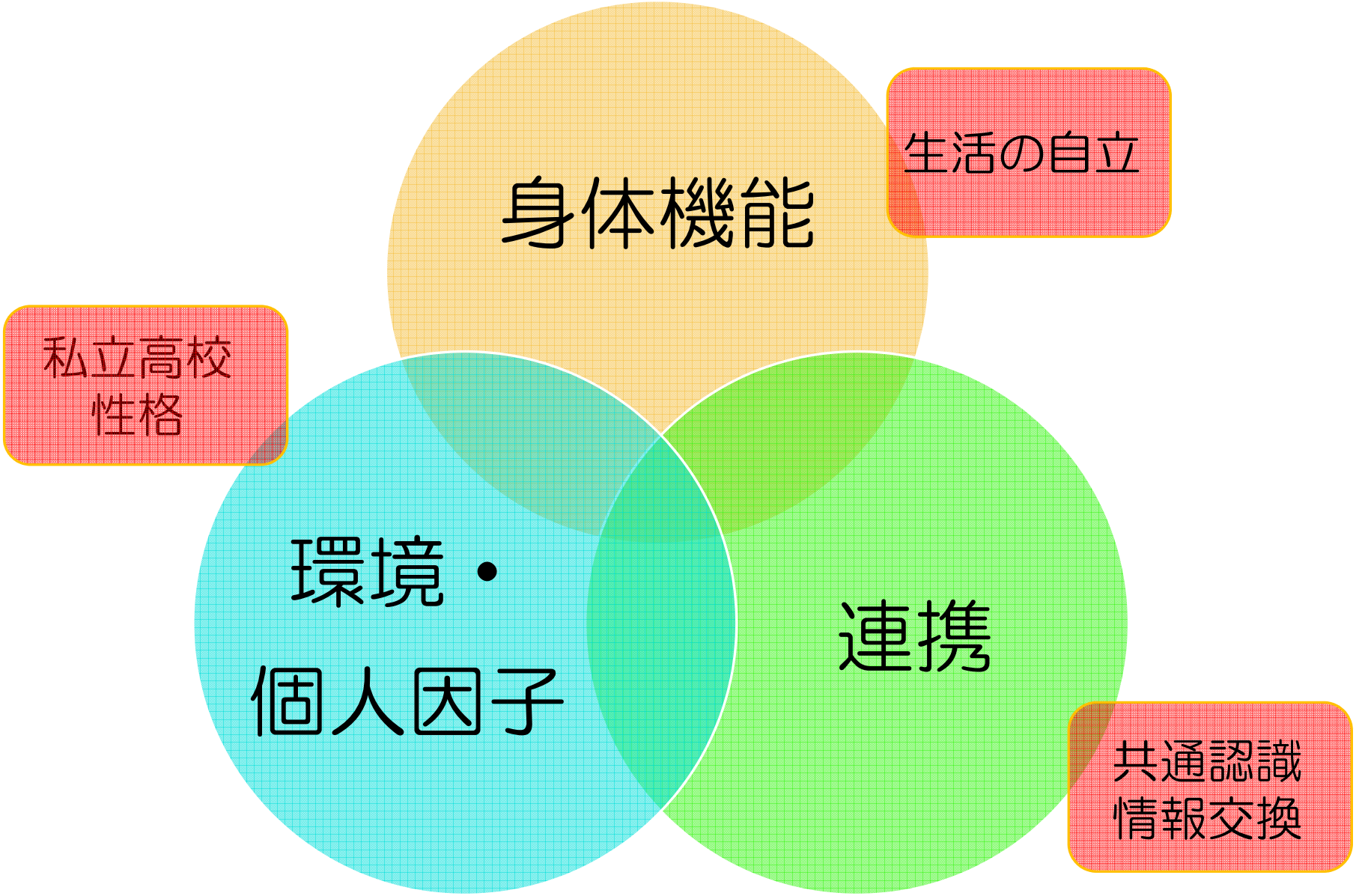
⇒全般的に授業態度は良好。ケアレスミスはあるが
現状周囲の助けを借りてカバーしている。
交友関係でも大きな問題はない。

復学を果たす！

退院後状況

病院	学校	本人
定期的な外来フォロー	部活動・体育等で密な関わり	携帯でのメモ 自主訓練

なぜ復学可能となったか？


身体機能
生活の自立
私立高校
性格
環境・
個人因子
連携
共通認識
情報交換

現在は…

現在は美容専門学校へ進学し一人暮らしを行っている。
新しい環境でも交友関係、勉学に取り組んでいるが美容師になるには課題も多い。
当院としては、今後とも継続的に相談支援を行っていく予定である。

４ケースを通して

まとめと課題 1

中学校と高校の対応の差。

中学校：教育委員会の関わりや環境面の配慮など柔軟に対応。
　　特別支援教育コーディネーターや養護教諭の関わり。
　高校：学校ごとの対応の差（復学支援の難しさ）
　　義務教育ではなく、高校によって対応が違う。
　　学習内容が高度で、年間の単位取得の問題。

＊大学への復学…

まとめと課題　２

- 高次脳機能障がいの理解の重要性

↓

周知の必要性

- 関わり方の難しさ

病気の児童生徒への特別支援教育

病気の子どもの理解のために

使用にあたっては、次ページの使用上の注意を必ずお読みください。

―高次脳機能障害―

生徒作品

全国特別支援学校病弱教育校長会

目　次

経験者からのメッセージ

Ⅰ　病気の理解について
　1　病気について知る
　2　治療について知る
　3　退院・復学に向けて

Ⅱ　高次脳機能障害の子どもの理解について（小・中学校用）
　1　入院生活が始まった時
　2　退院後ー小・中学校での生活
　3　質問コーナー
　4　高次脳機能障害についてもっと知る
　5　病院にある学校との連携

本冊子では，病院内において教育を行う場を総称して「病院にある学校」といいます。

「病院にある学校」には

特別支援学校（病弱）

病弱・身体虚弱特別支援学級等　があります。

まとめと課題　３

社会資源の問題

①移動支援事業

　自治体の事業のため、支援に差がある。

②放課後デイ

　１）送迎の問題

　２）他の児童との関わり

ご清聴ありがとうございました

今後とも
山形県支援センターと
山形県庄内支援センターを
どうぞよろしくお願いいたします。

山形県米沢市
直江兼続マスコットキャラクター
かねたん